

## サブプライムローンはCSRの問題である

國部 克彦 (こくぶ かつひこ)  
神戸大学大学院経営学研究科 教授

アメリカでは証券大手のリーマンブラザーズが破綻し、最大手の生命保険会社AIGに大量の公的資金が投入されるなど、金融恐慌さながらの状況を呈している。その根源がサブプライムローンの問題にあることは周知のとおりである。

しかし、金融とは本来、一時的に資金が必要な人に、資金の余裕のある人が融通する互助的な行為であった。そこには人間と人間の関係があり、お互いに協力し合って、それぞれの活動を盛り立て、社会の発展に寄与する目的があった。将来の災難に共同で対処する保険も同じである。これはまさにCSRの精神そのものである。

しかし、一方で貨幣は人格を持たないし、価値は増減するため、人間を無視して暴走する側面を持っている。その理不尽さは、旧約聖書やイスラム教などの主要な宗教が利子を厳しく戒めてきたことから明らかなように、古くから強く意識され警戒されてきたのである。

つまり、金融は最もCSR的な活動である反面、最も非CSR的になる側面を構造的に併せ持っている活動ということができ、まさに諸刃の剣である。このマイナスの側面が顕著に現れたのが、サブプライムローン問題である。

サブプライムローンとは、優良顧客(プライム)の下(サブ)に位置づけられる人々への住宅ローンで、信用力が低い人々が借り手となることに特徴がある。したがって金利も高い。元来、信用とは、借り手の返済能力を評価して供与されるものであるが、サブプライムローンの場合、担保としての住宅価格の上昇を想定して貸付が行われ、しかも、このローンは証券化して販売されるため、販売してしま

えば貸付者が延滞等のリスクを負う必要もない仕組みになっている。

したがって、資金の貸し手と借り手という人間関係を完全に無視して、相手の返済能力を顧慮することなく貸付を行い、貸し付けた権利を次々に証券化して販売していったのである。特に、低所得者層への貸付は熾烈を極め、その結果、返済できずに財産も家も取り上げられてしまうという、「略奪的貸付(predatory lending)」が多発したのである。

所得格差や貧困の問題は世界で最も大きな社会問題であり、企業もCSRの対象として取り組まねばならない問題であるが、サブプライムローンは、借り手である低所得者層の生活を破壊することが予見されながら、それを無視して仕組みが構築されていた。これはCSRとは真逆の行為であり、結局はそのツケを全世界が支払わなければならないことになってしまったのである。

これに対して、貧困層に対する無担保融資で、貧困の自助努力による克服と経済的・社会的発展に貢献しているバングラデシュのグラミン銀行という金融機関もある。グラミン銀行は貧困層に対する貸付にもかかわらず返済率は極めて高く、借り手の生活の質の向上に貢献している。ちなみに同銀行の創設者は2006年にノーベル平和賞を受賞している。

金融は本質的にCSR的であるにもかかわらず、貨幣による人間の排除が金融を最も非CSR的にすることを、サブプライムローン問題は明確に示しているが、その克服の鍵は金融における人間性の回復であり、それはCSRに共通の課題でもある。